

### TIAS、IOCと連携

2020年東京五輪・パラリンピック招致にあたり、日本政府は世界に向けたスポーツ振興貢献事業「スポーツ・フォー・トゥモロー」を国際公約業「スポーツ・フォー・トゥモロー」を国際公約業として掲げた。この事業の一環として筑波大が昨年設立したのが「つくば国際スポーツアカデミー(TIAS)」だ。

国際オリンピック委員会 (IOC) や連携協定を結ぶAISTSなどから講師を招き、講義はすべて英語で行う予定。五輪・パラリンピック教育をはじめスポーツマネジメントやスポーツ医学、コーチングなど、スポーツ界で必要とされるさまざまな分野の講義を通じ、各国の国際スポーツ界を担う人材を養成する国際拠点の一つとなることを目指している。

ことし10月の正式開講を前に、TIASは昨年9～10月、AISTSと共同で短期セミナーを開催した。世界21カ国から37人の参加者に対し、日本の五輪ムーブメントに関する講義はもちろん、日本文化体験や東京五輪・パラリンピック組織委訪問などの各種プログラムを実施し、好評を得た。また、今回のAISTS特別講義の前日には、講師陣がローザンヌのIOC本部を表敬訪問し、協力体制の強化を確認した。



TIAS講師陣とAISTSの学生らが記念撮影。講義は終始なごやかな雰囲気で行われた

＝スイス・ローザンヌ

AISTSでの特別講義は、2020年五輪・パラリンピック開催国としての日本の取り組みや文化を世界に発信する意義深い機会となった。真田教授は「外国の方を日本に招くだけではいけない。非常に得るものが大きかった」と収穫を強調した。

# 東京五輪へ「日本」アピール

国際スポーツ界を担う人材育成を目指し、筑波大が昨年設立した「つくば国際スポーツアカデミー(TIAS)」は13日、スイス・ローザンヌのスポーツマネジメント大学院(AISTS)で日本人として初めての特別講義を開催した。講義にはTIASアカデミー長の真田久教授と同副アカデミー長の清水論教授、同大講師の江上いずみ氏が登壇し、日本における五輪史や日本の「おもてなし」の心についてクイズやゲームを交えてわかりやすく説明。2020年東京五輪・パラリンピック組織委員会のマーケティング専任代理店である電通のスタッフもスポーツマーケティングビジネスについて講義を行い、活発な議論が交わされた。

## つくば国際スポーツアカデミー スイス・ローザンヌで特別講義

### 五輪支えるAISTS

スイス西部、レマン湖畔にあるローザンヌ。中世の薫りが今も残る人口約13万の静かな町は、IOCをはじめ水泳、柔道など国際競技団体の本部が集中する「オリンピックシティ」としても知られる。

AISTSは2000年、IOCが中心となってローザンヌに設立された。経済、法律、医学など、スポーツマネジメントに関する最先端プログラムが組み立てられており、今年度の受講生は世界26カ国41人。オリンピック、IOC職員など多様なメンバーが机を並べている。

卒業生の多くは各国オリンピック委員会や競技団体、研究機関など、国際スポーツ界の第一線で活動中。日本人も過去4人おり、13年卒業の塚本

拓也氏はTIASの海外事業広報戦略リーダーとして活躍している。



IOC本部のあるローザンヌ駅。五輪マークとともに「五輪の首都」との文字が誇らしげに掲げられている

### TIAS副アカデミー長 清水論教授

東京の中心には皇居があります。約1500年前、天皇が京都から東京へ遷都されました。玄関口である東京駅のそばには国会や官庁街が、北側には浅草や上野といった明治時代からの歓楽街があります。今では日本の人口の1割にあたる約1200万人が東京に住み、人口過密状態となっています。2020年東京五輪・パラリンピックは、湾岸地区を中心に開催される



開業した新幹線が、その象徴です。上下水道の整備など衛生環境の向上も、五輪を機に進みまされた。競技施設は皇宮の御用地やGHQに接収された旧軍用地の跡地に建設されました。大会中は世界中からアスリートをはじめとする多くの人々が東京を訪れ、復興を世界に示すショーケースとなりました。

当時の聖火リレーはアテネをスタートし、51日間で12の国を駆け抜けて日本へ到達しました。東南アジアなど太平洋戦争の戦火が及んだ諸国を経由する形でした。

2020年東京五輪・パラリンピックについては、IOCの中長期改革指針「アジェンダ2020」を受け、会場計画の見直しが進められています。

## 変貌した1964年の東京

## スイス・ローザンヌで特別講義

TIASアカデミー長 真田久教授

筑波大学には五輪ムーブメントに関する長い歴史があります。前身である東京高等師範学校の校長を務め、柔道の講道館を創設した嘉納治五郎は、スポーツを通じた教育を重視するクーベルタン男爵に共鳴し、アジア初のIOC委員を29年務めました。

1923年、関東大震災により被災した東京で、嘉納治五郎はスポーツを通じた復興に努めました。日本武道館や国立競技場の前身・明治神宮



## 受け継ぐ治五郎の精神

外苑競技場をはじめ、日本初のスポーツ公園となる墨田公園や錦糸公園の整備に尽力しました。東京には3度、夏季五輪を開催するチャンスがありました。40年、64年、そして2020年です。いずれも戦争や災害からの復興がテーマであり、おもてなしの精神が貫かれました。1964年開業のホテルニューオータニには「どこに座っても富士山が見えるように」と、回転展望レストランがあります。

日本人初のオリンピックアンバサダーは、金栗四三です。マラソン選手で、嘉納治五郎の教え子でした。11年と14年に世界記録を樹立した彼は、日本における「マラソンの父」と呼ばれています。

12年ストックホルム五輪では、気温32度の過酷な状況の中、半数のランナーが棄権、1人が亡くなりました。金栗四三も途中脱落しましたが、棄権したことを告げていなかったため、公式記録に残りませんでした。67年、大会関係者に招かれた彼は55年ぶりのゴールを果たし、史上もつとも遅いマラソン記録保持者となりました。

嘉納治五郎は水泳の普及にも力を入れました。貧富の差や年齢、性別を問わず、体ひとつでできるスポーツだからです。現在、日本のほぼすべての小学校にプールがあるのも、嘉納治五郎の影響といえます。

40年五輪招致の際、欧州から2週間以上かかる東京での開催には、IOC委員の誰も否定的でした。嘉納治五郎は「五輪を真に世界の文化にする」という大義を説き、幻の東京開催を勝ち取ったのです。

嘉納治五郎のレガシーとは何か。それはスポーツを通じた災害からの復興であり、スポーツによる「コミュニケーション」であり、体育とスポーツの国際的普及なのです。

江上いずみ氏

私は30年間、日本航空の客室乗務員を務めました。「おもてなしの心」の表し方は相手によって違いますが、その心は後輩にも伝え、お客さま一人一人を大切にしたいという心掛けを大事にしています。

「おもてなし」という言葉はすでに英語の中に入り込んでいて、欧米では日本文化の素晴らしさを示す概念のひとつとして捉えられています。ニューヨーク・タイムズ紙では「心遣い」と思いや「顧客のニーズへの献身」「細部まで行き届く配慮」の3つがその主な要素で、日本人はお辞儀や敬語などを通じ、心から歓迎の気持ちを示すと紹介されています。

例えばお辞儀には3種類あり、角度によって意味が違います。また「いらっしゃいませ」などの言葉とお辞儀を同時にしないのもポイントです。

2013年、和食がユネスコの世界無形文化遺産に登録されました。ここでみなさんに和食のマナーや箸遣いのタブラを紹介したいと思います。

